

茨田屯倉と古墳時代中期の開発

笹栗 拓

1. はじめに

昨今、古墳時代研究において、集落研究に対する機運が高まりつつある。近畿中央部においては、とりわけ中期に開発や手工業生産の進展が認められることから、この時期の変化が重要視されるようになってきたが（菱田 2007、笹栗 2020・2023 など）、『記紀』においても難波堀江や茨田堤、感玖大溝、依網池といった仁徳朝期を中心とする開発記事が複数あり、関連が注目される。

古墳時代前期～中期にさかのぼるようないわゆる前期ミヤケにかんしては、徹底的に史料批判をおこなう文献史学の立場からは懐疑的な見方がいまだ根強い（館野 2004、仁藤 2005 など）。ただし、難波の法円坂遺跡における大型倉庫群の発見以降、なんらかの史実の反映とみる見解も増えつつあり（鷺森 2001、上遠野 2017）、議論の進展が注目される。さらに茨田屯倉にかんしては、この 20 年ほどの間に文献史学、歴史地理学、考古学の各分野から複合的な検討がなされており、その実在性を評価する意見もみられるようになってきた（鷺森 2001、上遠野 2004・2010、菱田 2023）。茨田郡域は、これまで発掘調査があまり多いエリアではなかったものの、近年、京阪本線の連続立体交差事業の立ち上げにより調査件数が急増しており、詳細な検討をおこなうための下地が整いつつある。

そこで小稿では、茨田屯倉との関連が推測される古墳時代中期の開発の展開を、最新の発掘調査成果をもとに検討し、茨田屯倉の内実を詳らかにすることを目的に論を進めたい。

2. 茨田屯倉にかんする現状認識と課題

まずは、茨田屯倉に対する現状の認識を整理しておきたい。茨田郡の範囲については、枚方丘陵の西方の低地部に相当し、東は交野郡と讃良郡に、北西は淀川をはさんで摂津国と隣接する（図 1）。茨田屯倉の設置記事については、『記紀』仁徳条に難波堀江の開削や茨田堤と一連で記されているため、一般的には茨田屯倉は茨田堤と一体的なものと考えられている。その信憑性について鷺森浩幸や上遠野浩一は、難波の範囲内にある法円坂遺跡の大型倉庫群の存在や、茨田郡低地部における 5 世紀以降の集落遺跡の増加といった考古学的な所見から、茨田屯倉の存在を肯定的に捉えている（鷺森 2001、上遠野 2010・2017）。さらに鷺森は、隣接する讃良郡域も含め、平安時代に赤江御厨、茨田葦原、菰沼といった王家の所領が集中することを指摘し、古墳時代に茨田堤の築造による水利・耕地開発と連動して複合的な開発が進められた結果、王権の用益地として機能したとの認識を示す⁽¹⁾。

茨田堤にかんしては、茨田郡南部の古川沿いに式内社堤根神社（図 1：D 地点）があり、近接して大阪府指定史跡の伝茨田堤が存在する。調査によって堤防状遺構は中世以降に下ることが判明したが、

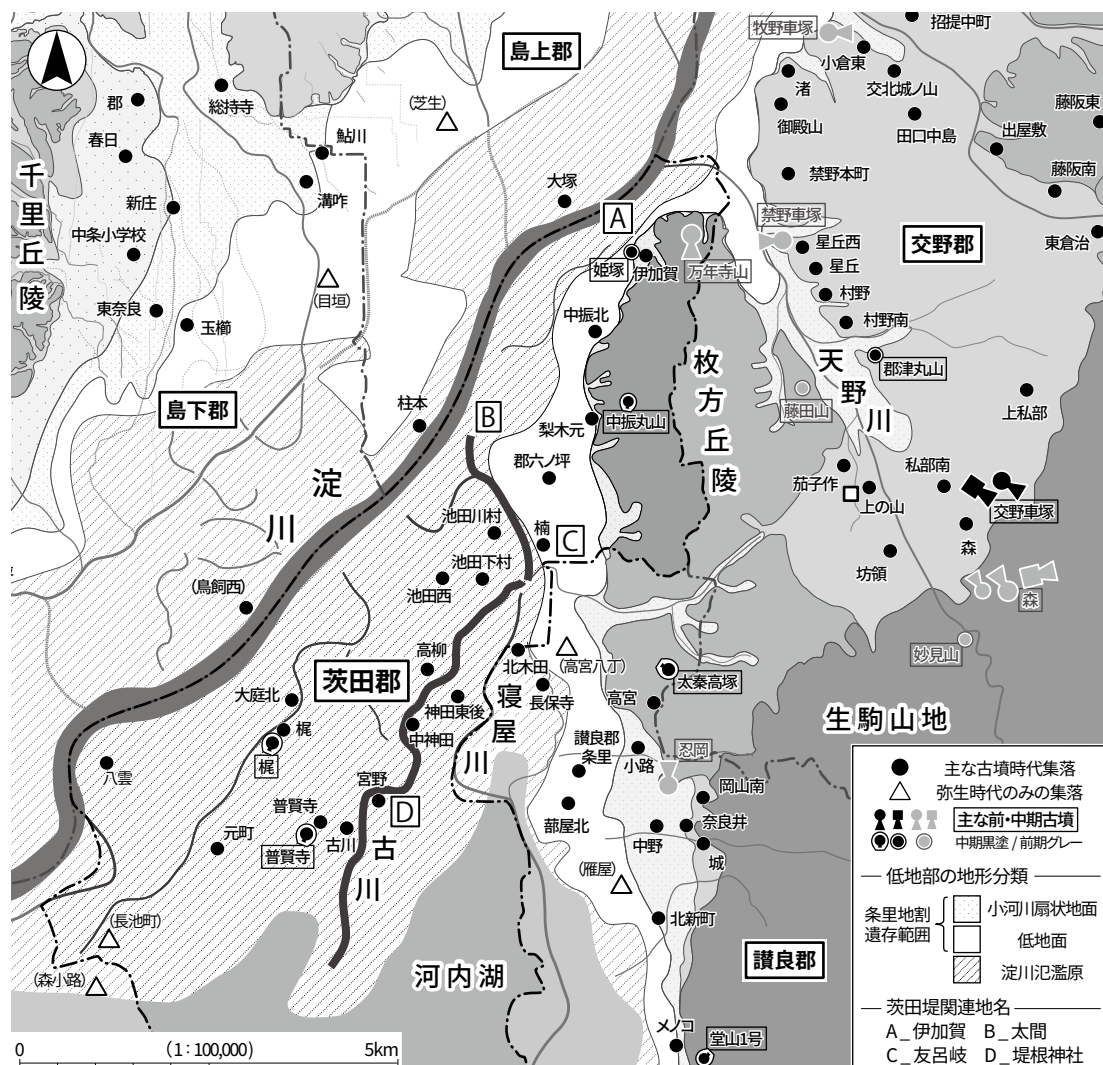


図1 茨田郡と周辺の主要な古墳時代遺跡

古墳時代中期末葉～後期初頭（TK47～MT15 型式期）の遺物も出土しており、茨田堤との関連も想定されている（宇治原・影山 2014）。また、菱田哲郎は、伝茨田堤も含め、古川沿いや低地部に分布する楠、池田下村、池田西、中神田、普賢寺、大庭北、梶といった遺跡が古墳時代中期以降に出現することに着目し、茨田郡北端の伊加賀から太間の淀川沿いと旧分流路の古川沿い（おおよそ図1のA－B－C－Dの間）にかけて茨田堤が築かれた可能性を指摘する（菱田 2023）。さらに、楠遺跡や長保持遺跡から出土した初期須恵器や韓式系軟質土器を『記紀』に記載された秦人＝渡来系集団の関与を示すものとみなし、茨田堤の築造により低湿地に集落が進出し開発が進んだとの認識を示した。ただし、表層的な遺構・遺物の検出例が立論の基礎となっているため、詳細な考古学的分析が必要となろう。他方、上遠野浩一は、茨田の範囲を伊加賀から友呂岐までの範囲とみなし、築堤は伊加賀から太間・楠付近の間に限定されとの見解を示している（上遠野 2004、図1のA－B－Cの範囲内）。

このように現状では、茨田堤の範囲が定まっているとはいえず、ましてや現在までに確実な築堤の証拠もない。そのため、堤の有無や範囲については慎重に検討していく必要がある。ただしその一方で、

淀川南岸の低地部において古墳時代中期に人間活動が活発化したことも紛れもない事実であり、隣接する交野郡内や讃良郡内における大規模な鍛冶・馬匹生産の成立をみる限り（真鍋ほか 2003、諫早編 2023）、北河内エリアの開発に王権が関与した可能性は十分に想定ができる。

茨田屯倉や堤の範囲を広域的とみるか狭い範囲に限定するのかについては、筆者はいまのところ定見を持ち合わせてはいない。ただし、少なくとも上遠野が示す狭義の茨田の範囲については、茨田屯倉に包括されるエリアとみることに異論はないと思われ、まずはこの範囲の実態を探ることは方法として有効といえる。特に近年では、伊加賀遺跡、中振北遺跡、梨木元遺跡の発掘調査が立て続けに実施され、古墳時代の遺構・遺物も豊富に確認されている（河本 2022、森本 2024、田中 2024）。今後も長期にわたって調査が継続することをふまえば、現状の認識整理は向後のたたき台として有意義な作業となる。上述の3遺跡のなかでは、伊加賀遺跡が最も調査歴があり古墳時代の遺構・遺物も豊富に出土していることから、まずは伊加賀遺跡の集落構造の復元と人間活動の展開を詳らかにする作業を進め、そののちに上遠野が茨田屯倉の範囲とみなした茨田郡北半の状況を整理したい。

なお、小稿で用いる古墳時代中期の年代観は、土師器の辻編年（辻 1999）と須恵器の陶邑編年（田辺 1981 など）に依拠し、各段階の併行関係は（笹栗 2022）にて示した理解にもとづく。

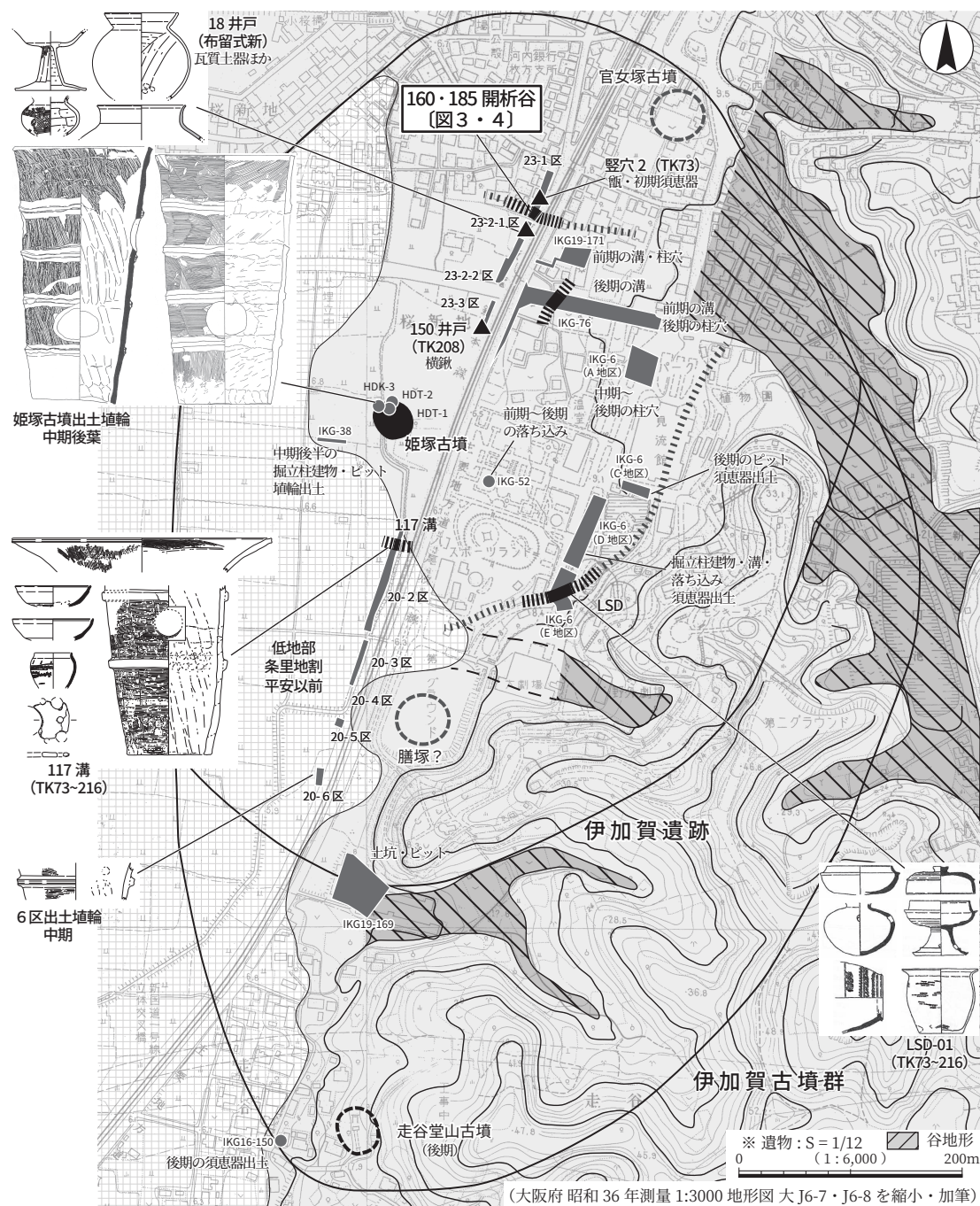
3. 伊加賀遺跡の検討

（1）遺跡の概要と既往の調査成果

伊加賀遺跡は、枚方丘陵北端西側の扇状地～低地部にかけて展開し、淀川と枚方丘陵が近最も接する地点に位置する（図1：A地点）。外来系土器など河川交易・交通とのかかわりを直接示す資料がこれまでに多く出土しているわけではないが、立地からみて淀川との関係が重視できると思われる。

既往の調査歴については、（河本 2022、田中 2024）に詳しくまとめられている。ひらかたパークのリニューアル工事や都市計画道路の建設の際にまとまった面積の調査が実施され、最近の京阪本線の立体交差事業に伴う調査によって弥生時代以降、断続的に人間活動が展開したことが明確になりつつある。このなかでも古墳時代～中世の遺構・遺物が豊富で、主に東側の丘陵斜面地から扇状地端部にかけて遺構・遺物が検出されている（図2）。さらに遺跡内には、外面にBd種ヨコハケや一次タテハケを施す中期後葉～末葉の埴輪を伴う姫塚古墳が現存するほか、削平された古墳の存在や埴輪の出土がいくつか知られている。そのなかには、20-2区117溝で出土したような外面にBb種ヨコハケを施す底部高の高いⅣ-1期頃にさかのぼるやや古手の埴輪も含まれており⁽²⁾、中期前葉～末葉にかけて継続的に造墓活動がおこなわれたことがわかる。

古墳時代以前の遺構・遺物については、弥生時代後期後半～古墳時代初頭にさかのぼるものも含まれるが、増加するのは中期以降となる。特に最近の調査では、主に遺跡の北側の扇状地上、具体的には南南東から北北西にむかってのびる開析谷から連なる流路の周辺で、竪穴建物や井戸などの居住関連遺構がまとまって検出されている。特に23-2-1区では、異なる時期の遺物が重層的に出土した160・185谷が検出されており、埋土上層（160谷）からは古手の韓式系土器が多量に出土している



遺物は希薄であり、この時期までは明確な人間活動の痕跡は見出せない。

段階B；弥生後期後半～古墳初頭 谷下層（185 谷）からは、主に庄内式期の遺物が一定量出土している。周辺では、弥生時代後期～古墳時代初頭までの竪穴建物や井戸なども検出されており、居住域が営まれたことがわかるが、前期以降（布留式古～中段階）は遺物の出土量が激減するため、集落が営まれた時期は一時的なものであったことがうかがえる⁽³⁾。

段階C；古墳中期初頭 後続する中期初頭になると、一転して遺構・遺物が急増し、谷下層（185 谷）からは布留式新段階新相～中期前葉頃（辻編年 2 段階新相～3 段階古相／TG232～TK73 型式期）の土師器が豊富に出土している。谷の堆積状況をみると、砂礫層と有機質を多分に含む暗色砂層が互層状に堆積しており、この場所で谷の埋積と下刻が繰り返されたことがわかる。埋土内からは、上述の庄内式期の土師器とともに中期の土師器が出土することから、古墳時代初頭以前の古い時期の谷が重複した位置にあり、同じ場所で古い時期の埋積物を押し流しつつ徐々に埋積が進行した状況が復元できる。土砂流出が増大した要因については定かではないが、人間活動の活発化と連動していることは明らかであり、丘陵上の植生攪乱等に伴って土砂流出が増大した可能性が高い。

段階D；古墳中期前葉 中期初頭以降、徐々に谷は埋積が進み、中期前葉段階には浅い窪地となった部分に韓式系土器をはじめとする土器類や加工痕の残る木材がまとまって投棄される。韓式系土器には、頸部がやや長い外面格子タタキの大小の壺類 10 個体以上と平底鉢といった軟質土器と、初期須恵器または陶質土器の把手付椀や甗・大甕などがあり、TK73 型式期に併行する北河内では最古級の良好な資料群となる。これとともに在来の土師器やミニチュア土器、滑石製白玉、加工木などがまとまって出土しているが、加工木は窪地部分から集積した状態で出土していたことから、貯木された状態であった可能性が推定されている。さらに南側低地部の 20-2 区や 20-6 区では、この時期の初期須恵器や甗とともに埴輪や鉄滓が出土している点も特筆され、遺跡内で森林開発や鍛冶生産がおこなわれていたことと、それとあわせて造墓活動も伴っていたことがわかる。

段階E；古墳中期中葉～後葉 谷埋土上層には、上述の資料よりも後出する資料は含まれないため、中期前葉までに埋没したことがわかる。ただし 160・185 谷の周囲では、後続する中期中葉の 150 井戸（23-3 区）などの居住関連遺構が確認されているほか、やや離れた枚方市実施の IKG-6 区においても平底鉢や初期須恵器を含む大溝（LSD）が検出されており（谷川・西村 1996）、集落が継続していることがわかる。IKG-6 区の大溝については、その位置や規模からみて上述した南南東―北北東方向の開析谷から取水する灌漑水路とみられ、この時期までに水利開発が進んだことが示唆される。

後続する中期後葉～末葉には、遺構・遺物が減少する傾向がみられるが、居住域に近接して姫塚古墳が築造される。不確定ながらも茨田郡内で最大の直径 40 m という規模が推定されており、周囲には削平された古墳がいくつか存在する。このことから、中期前葉～末葉にかけて居住・生産活動とあわせて造墓活動が継続したことがうかがえる。

なお、後期以降の状況を付記すれば、後期後葉～飛鳥時代初頭の須恵器杯類や鉄滓がまとまって出土した土坑（23-1 区 9 土坑）、飛鳥～平安時代の掘立柱建物、平安時代の正方位を志向する耕作関連

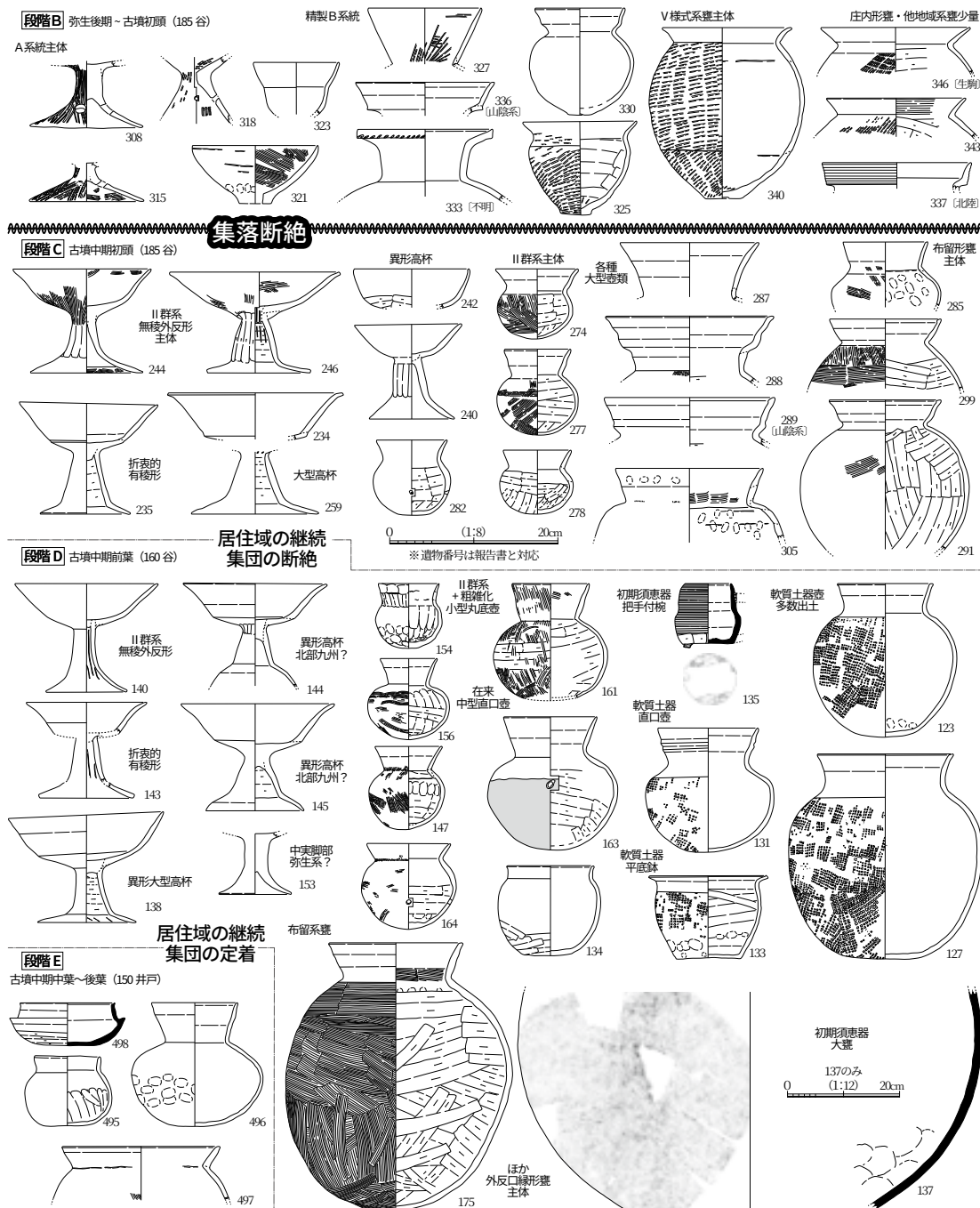


図3 160・185谷ほか出土遺物（田中 2024 をもとに作成）

遺構、中世の掘立柱建物や井戸、耕作関連遺構など、各時期の遺構が検出されている。

（3）古墳時代中期における人間活動の活発化と居住集団・生産活動

ここまでの検討により、伊加賀遺跡では古墳時代中期以降、人間活動が活発化し、その後も長期的にわたって集落が継続していたことが明らかとなった。弥生時代後期～古墳時代初頭に一時的に居住域が形成されるが、前期には継続しないため、前期（段階B）以前の人間活動は断続的なものであり、中期初頭（段階C）を境に状況が一変したことがわかる（表1）。

特に中期初頭以降、谷および遺跡全体の遺物の出土量の増加や土砂流出量が増大から、人間活動が

表 1 谷の埋積過程と人間活動の動向

段階	谷の機能・埋没状況	人間活動・谷の埋没状況	土器様相・居住集団・活動内容
段階 A；弥生後期以前	下部谷機能～埋没	(居住域なし、未開発)	
段階 B；弥生後期～古墳初頭 (庄内式期後半の資料が主体) (古墳前期)	谷下層〔185〕機能時一古 (谷下層〔185〕機能時)	居住域進出 → 短期間・一時的 (居住域・人間活動不明→断絶期)	V様式系・A系統土器群主体、庄内形甕・外来系ごく少量 → 在地系集団主体の小規模居住域
段階 C；古墳中期初頭 (辻2新相～3段階古相 / TG232～TK73 型式期)	谷下層〔185〕機能時一新 (谷の下刻・埋没の繰り返し)	人間活動再開・活発化 → 丘陵部の植生攪乱が進行？	II群系土器群 + α (畿内通有土器群主体) → 古市・佐紀集団の関与による開発？ ※木材生産ほか
段階 D；古墳中期前葉 (辻3段階古相 / TK73 型式期)	谷上層〔160〕機能時 (谷の埋没進行)	人間活動のさらなる活発化 → 丘陵部の植生攪乱がさらに進行？	韓式系土器群 + I群系土器群 → 渡来系集団 + 他地域系集団が混在・開発に従事 ※鍛冶生産・木材生産・古墳築造 (20-13 区 117 溝出土埴輪)
段階 E；古墳中期中葉～後葉 (辻3新相～5段階 / TK216-47 型式期)	谷上層〔160〕埋没後 (流路の移動)	継続的な人間活動、別の谷へ切り替わり → 居住域継続 = 集団定着	土師器・須恵器・韓式系土器 (23-3 区 150 井戸や IKG-6 区 LSD など) → 集団の定着・開発の継続 ※水利開発 (IKG-6 区 LSD)・古墳築造 (姫塚古墳ほか)
(古墳後期 / 飛鳥・奈良 / 平安 / 中世)	(中世；水路 (154 溝) 掘削)	(継続的な居住・生産活動)	特記事項：鍛冶生産 (古墳後期) / 掘立柱建物群 (飛鳥) / 寺院造営？ (奈良) / 緑釉・灰釉陶器、低地部条里開発 (平安) / 居住域の再進出、低地部条里地割に即した開発 (中世)

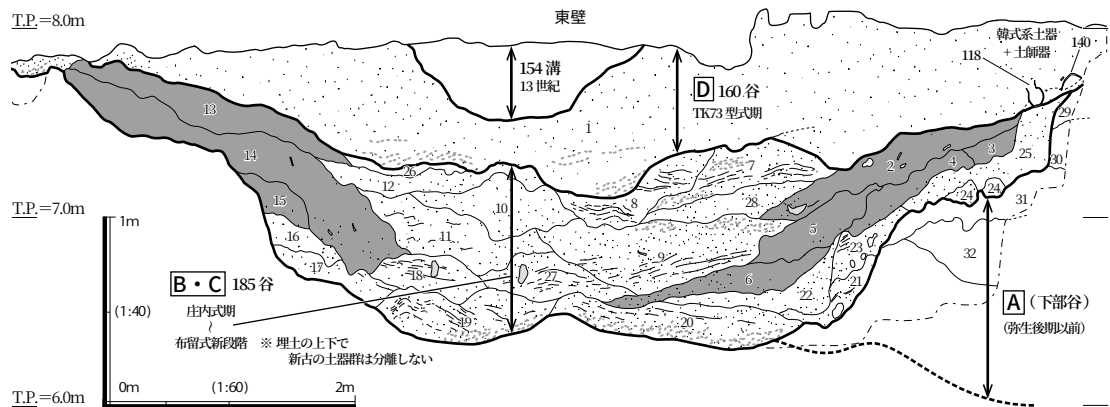


図 4 160・185 谷の堆積過程（田中 2024 をもとに作成）

活発化することとあわせて丘陵部の植生の攪乱が進行したことが推定できる。そして、前段階に顕著な居住域が不在であることをふまれば、遠近はともかくとして、別の場所からの移動を伴う形で居住域が形成されたことがうかがえる。さらにこの段階の土師器は、概ね辻編年 2 段階新相～3 段階頃 (TG232～ON231 型式期併行) に比定でき、畿内通有の外面ハケ調整で仕上げる II 群系の無稜高杯や小型丸底壺を主体としつつも、形式や製作技術にバリエーションがある。こうした土師器の形式差や系統差を集団差として理解してよいのであれば（三好 2010、笹栗 2023 など）、同一集落内に出自の異なる複数集団が共存していた状況が復元できる。

その一方で、層位的に新しい谷の埋土上層（160 谷）からは韓式系土器が多量に出土しており、渡来系集団の定着が確実視できる⁽⁴⁾。時期については、土師器の高杯と小型丸底壺の年代観や全羅南道系の韓式系土器が含まれる点などから辻編年 3 段階古相（TK73 型式期併行）とみるのが妥当であるが、土師器の外表面ハケ調整を施す II 群系の無稜高杯（140）や小型丸底壺（47・156）は下層（185 谷）の同系統の土師器（244・246 や 147・156）とあまり形態差はない。そのため、谷の埋没状況から下層（段階 C）と上層（段階 D）は明確に分離ができるものの、出土資料の時間的隔たりは小さい。その一方で、下層資料は在来の土師器が主体であるのに対し、直後の上層資料には韓式系土器が主体を占めるなど、短期間で土器群の組成が抜本的に変化しているほか、在来の土師器にかんしても下層と上層では主要な形式や製作技術系統が大きく異なる。このことから、中期前葉を境に主要な居

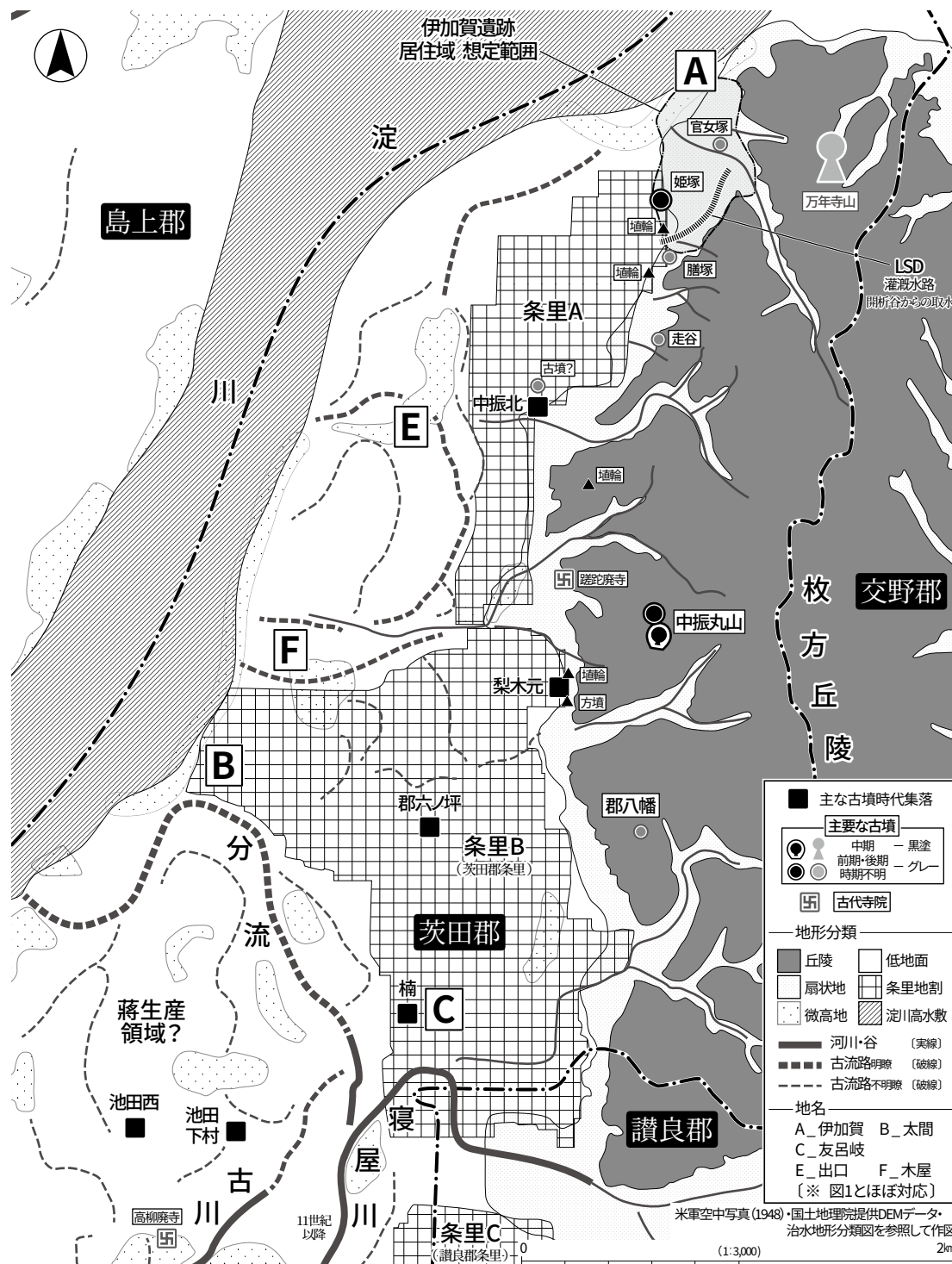


図5 茨田郡北半の地形環境と土地利用

住集団の入れ替わりが推定でき、短期間に頻繁な集団の移動・移住が繰り返された状況が復元できる。

集落内での生産活動については、上述の調査成果から、水利開発（IKG-6 区の灌漑水路；LSD）に加え、木材生産（丘陵上の植生攪乱と 160 谷の貯木痕跡）や鍛冶生産（20-2 区の鉄滓）が伴うことがわかる。具体像を復元するためには資料の増加を待つ必要があるが、このような水利開発に複合的に手工業生産が付随する状況はこれまで筆者が検討をおこなってきた古市古墳群周辺の東除川扇状地や淀川

対岸の安威川流域一帯の様相と共通する（笹栗 2020・2023）。さらに、集団の移動を伴う形で開発が進められる点や、小規模・少数ながらも近接した位置で同時期に埴輪を伴う古墳が築造される点も共通しており、中期特有の開発システムの存在が示唆される。

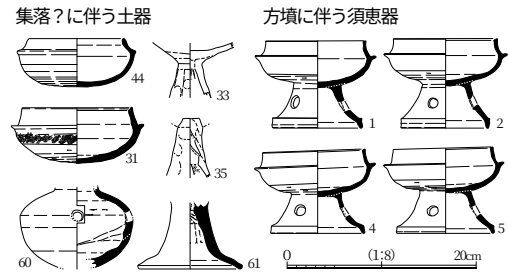


図6 梨木元遺跡出土遺物（森本 2024）

4. 茨田郡北半の開発と茨田屯倉

以上までの検討により、茨田郡の北端の伊加賀遺跡の周辺において、古墳時代中期に突如として人間活動が活発化し、複合的な開発が進められたことが明白になってきた。その背景を探るためには、上述したように、『記紀』に記される茨田屯倉とどのようにかわるのかが重要な論点となるため、以下では茨田郡北半の状況を俯瞰し、このエリアの開発の展開について現状の見通しを整理したい。

地形の特徴と居住・生産・造墓活動の展開 茨田郡北半は、枚方丘陵と淀川に挟まれた地形的にまとまりのあるエリアであり、この範囲は狭義の茨田の範囲に包括される（上遠野 2010）。伊加賀遺跡は、このエリアの最北端の淀川と枚方丘陵が接する要所に位置するが、微視的にみれば枚方丘陵から流出した比較的規模の大きな開析谷に付随する扇状地上に立地する点が特徴といえる。枚方丘陵の西側では、このような丘陵を開析する小さな谷とそれによって形成されたとく小規模な扇状地が点在しており、中振北遺跡や梨木元遺跡といった各時代の集落遺跡も、こうしたミニ扇状地上と呼べるような場所とその周辺に立地している。このうち梨木元遺跡では、中期前葉～中葉（TK216～TK208 型式期）の須恵器や土師器など、少量ながらも古墳時代中期以降の遺物が出土しており（図6、森本 2024）、いまだ実態が不明確ながらも伊加賀遺跡と近い時期に集落が形成されていたことがわかる。

さらに東側の丘陵上や扇状地面には、中期末葉～後期初頭の中振丸山1・2号墳や梨木元遺跡の方墳が存在するほか、埴輪の散在的な出土も報告されている。これらの古墳は、いずれも中期以降に出現することから（西田 2023）、ミニ扇状地上における居住・生産活動とのかかわりが濃厚といえる。

一方、西側の低地部には、淀川沿いに流路痕跡や自然堤防帯が確認でき、現在まで続く出口や木屋の集落はいずれも自然堤防上にのっている（図5：E・F地点）。それに対し、東側の後背地には戦後まで条里地割が良好に遺存しており（図5：条里A・B）、おおそフラットな地形でもあることから、排水路の掘削により可耕地としての土地利用が可能なエリアといえる。これまでに発掘調査はほとんど実施されていないが、伊加賀遺跡の周辺では条里に即した開発が平安時代頃までさかのぼる可能性が指摘されている（河本 2022）。耕地開発がいつ頃までさかのぼるかについては、現状ではデータが不足しているため不明と言わざるを得ないが、低地部には楠遺跡や郡六ノ坪遺跡など初期須恵器や韓式系軟質土器がまとまって出土する遺跡があり（濱田 2001・2008）、古墳時代中期に渡来系集団を動員するようななんらかの開発がおこなわれた蓋然性が高い。ところで淀川対岸の摂津東部では、地形に即して耕地区画が整理されたエリアは開発時期が中世以降に下るのに対し、条里地割が広がるエリアの水田開発は古代もしくは古墳時代までさかのぼるが高い、という見通しが得られている（笹

栗 2023・2024a)。より詳細な検証が必要ではあるが、こうした事例を参考にすれば条里地割の範囲に位置する楠遺跡や郡六ノ坪遺跡における古墳時代中期の渡来系集団の活動を水田・水利開発に結び付けて考えることも可能であり、この点については資料の増加を待つて改めて検証をしたい。

茨田屯倉の実態と開発の主体 『記紀』仁徳条に記された茨田堤が実際に築かれたかどうかについては、現在までに確実な築堤の証拠がない以上、慎重に考える必要があると思われるが⁽⁵⁾、ここまで検討してきたように古墳時代中期に茨田郡域の開発が進展したことは紛れもない事実と捉えてよい。現状では調査データが不足しているが、水田開発と複合的な生産が付随する状況は文献史学の研究者によって示されるミヤケの性格（鷺森 2001、館野 2004 など）とも大きな矛盾はない。

また、鷺森浩幸は、茨田屯倉が王権直轄の用益地として機能したことと、そのはじまりが古墳時代にさかのぼる可能性を指摘しているが（鷺森 2001）、王権の関与という視点でみた場合、古市古墳群からの影響により B 種ヨコハケを施す埴輪の採用や規格の使い分けがあったとする西本和哉の指摘は重要である（西本 2008）。さらには、新しく集落が形成される際に集団の移住を伴う点や、時期ごとに集団の再編成がおこなわれる点は、在地の自律的な展開と理解するよりも他律的な要因とみるのが妥当であり、その背後に王権の関与があったという理解は十分に可能といえる（笹栗 2023）。

以上から、茨田郡北半の開発のあり方は大阪平野で普遍的にみられる中期特有の開発システム（笹栗 2020・2023・2025）を踏襲したものであり、『記紀』仁徳条に記載された茨田堤や茨田屯倉とも整合する内容を備えていると考える。茨田屯倉と直接むすびつけることにかんしては、否定的な意見も含め、さまざまな意見が噴出することが予想されるが、『記紀』に記されるミヤケ所在地の考古学的データをもとにその内容を吟味する作業は、ミヤケの実態を明らかにするための突破口となろう。

5. おわりに

小稿では、茨田郡北半の調査事例の検討から、古墳時代中期以降、この地域の開発が進んだことを明らかにし、その背後に王権の関与が想定できるとの見通しを述べた。そして、この地域の開発のあり方は、文献史学の研究者が述べるミヤケの性格とも整合するものであることから、『記紀』に記された茨田屯倉にかかわるものと捉え、議論を前進させていく必要性を説いた。

ただし、冒頭で述べたように、調査は今後も継続することから、新たな成果をもとに小稿で示した見解を適宜、修正しながらより確度の高い議論へ昇華させることが重要である。さらには、枚方市による既往の伊加賀遺跡の調査成果の再検討も必須となるため、その機運を高めていく必要がある。

また、今回は十分に検討ができなかったが、茨田郡全体を俯瞰する作業も重要である。この点にかんしては、茨田郡南西の低湿地が菰生産の場として重要視されているが（鷺森 2001、菱田 2023）、梶遺跡や大庭北遺跡、元町遺跡や普賢寺遺跡における集落形成や古墳築造動向からも、中期中葉～後期前半にかけてなんらかの居住・生産活動が活発化したことは疑いない。そのため今後は、淀川や河内湖における漁労活動などとの関連も視野に入れつつ、調査データを精査しながら淀川デルタ地域の地形環境の復元と人間活動の相互関係を明らかにすることも課題といえる。

さらに隣接する交野郡域や讃良郡域では、鍛冶や馬匹などの大規模生産地が成立するが（真鍋ほか 2023、諫早編 2023）、こうした大規模な手工業生産遺跡は王権による関与が濃厚である（菱田 2007）。隣接する地域との相互関係や北河内全体を俯瞰した検討も不可欠であり、比較検討を通して近畿中央部における王権の伸張についてより深く考究していきたいと思う⁽⁶⁾。

このような多岐に渡る課題を解決するための作業を継続することを約束し、小稿の結びとしたい。

小稿は、2022 年 3 月 15 日に実施された伊加賀遺跡の枚方市調査区の遺物検討会や、大阪府文化財センターが近年実施した京阪連立事業の調査成果を通じて着想を得たものである。枚方は、府大入学後、最初に調査に参加したフィールドであり、菱田先生や西田敏秀さんから頂いた学恩に改めて感謝したいと思います。また、センターが実施した調査成果については、同僚の田中秀弥さんから詳細なご教示を頂いたほか、長時間にわたる資料の閲覧や議論に付き合って頂いた。このほかにも、以下の方々からも多くのご教示ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。

諫早直人、木村理、田中秀弥、堂本智子、中久保辰夫、西田敏秀、菱田哲郎、松野元宏、真鍋成史、森本徹

註

- (1) 茨田屯倉にかんしては、隣接する交野郡に三宅の地名が残ることから、交野郡内とする説もあるが（網 2005 など）、現在は茨田郡内に比定する見解に落ち着きつつある（菱田 2023）。その学説にかかわる経緯と現状認識については、（菱田 2023）に詳しくまとめられているため、そちらを参照されたい。
- (2) 埴輪の所見にかんしては、木村理氏にご教示を頂いた。
- (3) 古墳時代前期には、伊加賀遺跡の背後の丘陵上に万年寺玉山古墳が築造されるが、今のところ是对応するような居住域が形成された気配はうかがえない。万年寺山古墳の立地を仔細にみれば、尾根のやや東寄りに位置しているため、対応する集落を想定するならば、枚方丘陵の東方が候補地になると思われる。また、淀川に突き出す丘陵尾根の突端部という立地を鑑みれば、淀川全体の河川交易にかかわる性格を想定することもできるため、より広い視野でこの古墳の築造意義を探る必要があるだろう。
- (4) 韓式系軟質土器には、格子タタキを施す平底鉢や口縁部がやや長い壺などやや特異な形態のものがあり、系譜については栄山江流域が想定される。詳細については、中久保辰夫氏にご教示を頂いた。
- (5) 古墳時代中期の集落の進出や水利開発は、旧流路である排水流路とそれによって形成された微高地を中心に利用したものが主であることから（井上 2023、笹栗 2023）、現状ではこの時期に長大な堤が築造されたとする意見（菱田 2023）は説得的なものではないと考えている。
- (6) 隣接する天野川扇状地の様相については（笹栗 2024b）にて、大規模生産遺跡の評価については（笹栗 2025）にて、それぞれ検討を進めており、併せて参照されたい。

引用文献

- 網 伸也 2005 「淀川水系のミヤケ」『考古学ジャーナル』No.533 ニューサイエンス社
- 諫早直人編 2023 『牧の景観考古学 古墳時代初期馬匹生産とその周辺』京都府立大学文学部
- 井上智博 2023 「河内平野北東部における弥生時代～古墳時代の地形変遷と人間活動―放牧地の検討を前提として―」『牧の景観考古学 古墳時代初期馬匹生産とその周辺』京都府立大学文学部

- 宇治原靖泰・影山美智与 2014『史跡伝茨田堤発掘調査報告書』門真市埋蔵文化財発掘調査報告第9集 門真市教育委員会
- 上遠野浩一 2004「「茨田堤」の比定地について」『歴史地理学』N0.220 歴史地理学会
- 上遠野浩一 2010「茨田と交野の開発ーミヤケに関連してー」『歴史地理学』N0.249 歴史地理学会
- 上遠野浩一 2017「『古事記』『日本書紀』の開発記事についてー七世紀以前の開発史研究の現状と課題ー」『日本書紀研究』第三十二冊 塙書房
- 河本純一 2022『伊加賀遺跡・伊加賀古墳群』（公財）大阪府文化財センター調査報告書 第318集（公財）大阪府文化財センター
- 鷺森浩幸 2001『日本古代の王家・寺院と所領』塙書房
- 笹栗 拓 2020「古市古墳群周辺の土地利用と地域開発」『大阪文化財研究』第53号（公財）大阪府文化財センター
- 笹栗 拓 2022「摂津東部・上牧遺跡における古墳時代の土器編年」『大阪文化財研究』第55号（公財）大阪府文化財センター
- 笹栗 拓 2023「中期大型前方後円墳の周辺集落と地域開発ー摂津・安威川流域の分析からー」『考古学研究』第69巻第4号 考古学研究会
- 笹栗 拓 2024a「高槻市上牧遺跡の調査ー淀川河畔の地形環境と土地利用の変遷ー」『古代学研究』第239号 古代学研究会
- 笹栗 拓 2024b「古墳時代中期の開発と森遺跡の出現背景」『交野の重点遺跡 森遺跡を探るー渡来系資料からのアプローチー』令和6年度市民文化財講座発表資料 交野市教育委員会
- 笹栗 拓 2025「大阪平野の生産遺跡と開発の諸段階」『古代学研究』第242号 古代学研究会
- 館野和己 2004「ヤマト王権の列島支配」『日本史講座1』東京大学出版会
- 田中秀弥 2024『伊加賀遺跡2・伊加賀古墳群2』（公財）大阪府文化財センター調査報告書 第335集（公財）大阪府文化財センター
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 谷川博史・西村健司 1996「⑪伊加賀遺跡（第6次調査）」『枚方市文化財年報』17（財）枚方市文化財研究調査会
- 辻 美紀 1999「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学』大阪大学文学部考古学研究室
- 西田敏秀 2023「枚方里の漢人と鉄生産の原像ー枚方市伊加賀遺跡とその周辺ー」『交野の王墓と鉄器生産』交野市立教育文化会館展示図録Ⅰ 交野市教育委員会
- 西本和哉 2009「生駒山西麓地域における古墳時代中期の古墳群形成の特質」『考古学研究』第55巻第4号 考古学研究会
- 仁藤敦史 2005「古代王権とミヤケ制」『考古学ジャーナル』No.533 ニューサイエンス社
- 濱田延充 2001『楠遺跡Ⅱ』寝屋川市文化財資料25 寝屋川市教育委員会
- 濱田延充 2008「郡六ノ坪遺跡出土の韓式系土器」『韓式系土器研究』X 韓式系土器研究会
- 菱田哲郎 2007『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会
- 菱田哲郎 2023「淀川左岸の開発と5世紀の王権ー茨田堤を中心にー」『牧の景観考古学 古墳時代初期馬匹生産とその周辺』京都府立大学文学部
- 真鍋成史ほか 2023『交野の王墓と鉄器生産』交野市立教育文化会館展示図録Ⅰ 交野市教育委員会
- 三好 玄 2010「布留式土器様式構造の再検討ー精製器種を中心にー」『待兼山考古学論集Ⅱー大阪大学考古学研究室開設20周年記念論集ー』大阪大学考古学研究室
- 森本 徹 2024『梨木元遺跡』（公財）大阪府文化財センター調査報告書 第332集（公財）大阪府文化財センター